【367】

氏　名（本籍）	**甲　斐　雄一郎（東 京 都）**
学 位 の 種 類	博　　士（教 育 学）
学 位 記 番 号	博　乙　第　2254　号
学位授与年月日	平成 19 年 1 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	**国語科の成立過程と教科内容編成**

主　査	筑波大学教授	博士（教育学）	桑　原　　隆
副　査	筑波大学教授	博士（教育学）	大　高　　泉
副　査	筑波大学教授	博士（教育学）	塚　田　泰　彦
副　査	筑波大学教授	博士（教育学）	大　戸　安　弘

論　文　の　内　容　の　要　旨

1. 目的

本論文は，明治 33 年の小学校令において制度的に成立した国語科の成立過程と，その成立に伴う国語科独自の教科内容編成の実態及び観点を史料に基づいて明らかにすることを目的としている。明治 10 年代，20 年代は学校教育が近代化されていく過程にあり，国語科成立以前の言語教育の関連教科及び小学校全体の教育課程の編成も改編を重ねてきた。同時に，言語教育の教育内容そのものも安定していなかった。このような歴史的な時期に焦点を絞り，国語科の制度上の成立過程と国語科の教育内容が相対的に自立していく過程との両者の関係について，その要因を抽出し分析し究明することが本論文の目的である。

2. 対象と方法

国語科の成立過程について本論文で研究対象としている歴史的時期は，明治 19 年から明治 37 年の期間である。明治 19 年は，国語科の前身である読書・作文・習字という教科が「小学校ノ学科及其程度」によって定められた年であり，明治 37 年は明治 33 年の国語科成立を経て第一期国定教科書が完成した年である。中心的な研究史料はこの間に刊行された検定教科書である。その教科書を編集･刊行の時期によって，A 類･B 類・C 類・D 類・E 類に分類して分析を行っている。教科書は教科内容を具体化したものであり，その教科内容決定の要因を①関連教科内要因，②教科課程内要因，③教科課程外要因という三つの視点を設定し，それぞれ教科書の A 類～ E 類と対応させながら分析と考察を行っている。

3. 結果

1 の目的を遂行するために，三つの課題を設定している。第一の課題は，読書科における題材の問題である。第二は形式に関する教材規定で，第三は読書科と作文科との関連である。第一の課題を明らかにするために，国語科が成立する以前にその中心的な母胎でもあった読書科が制度上どのような経緯で成立したのかを第一章で検討している。その検討を基に第二章及び第三章において，読書科における題材について，①の関連教科内要因に着目し地理科・歴史科・理科の題材との比較検討を通して，その変遷及び特徴を明らかに

した。第二の課題は第四章において，とくに教材の出典と口語文体の比率の変化に着目して丹念に教科書を分析し，形式についての考え方の変容を解明した。第五章では，第三の課題である読書科と作文科との関係について，作文科が国語科への統合に向けて，どのような位置付けがなされていたのかを考察した。第六章では，明治 33 年に国語科が成立した後の第一期国定教科書について，それ以前の教科書との比較を通して題材と形式の両面にわたって究明した。

4. 考察

国語科として統合される以前の教科は，読書科･作文科･習字科であった。その中心的教科は読書科であったが，その読書科の教育内容が小学校段階にあって形式に加え，題材の観点も含むようになり，この二元的教科内容の成立が国語科成立と深く関係しているとの見解を提唱している。地理科・歴史科・理科等の他教科との関連においては，高等小学校の題材の点において，B 類の教科書になってそれまでとは違った傾向，すなわち古典主義への回帰という傾向があらわれ，そのことが地理科・歴史科から読書科は相対的な独自性を獲得することになったことを指摘している。形式面に関しては，口語文体の比率が D 類の教科書になって飛躍的に増加しており，これは「国文ノ模範」から「国語ノ模範」へと国語観の変容があったことの証左として位置づけている。その口語文体の顕著のあらわれを，沖縄県の教科書に見い出せることを明らかにした。教育課程外要因としての学習状況（学習の困難さ，就学率の低迷）や社会的状況（方言格差による問題等）に加えて，「国語ノ模範」といった形式に関わる考え方の変容が国語科の成立を促す大きな要因と考えることができる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

国語科の成立過程において，国語科の教育内容はどのような観点から編成され，どのようにそれが変化してきたのか，その両者の関係を究明することが本論文の目的である。その教育内容の実体があらわされているものとして教科書を中心的な史料として，膨大な教科書を A 類～ E 類に分類し丹念に分析し考察した。具体的な教科書の内容から，国語科の成立を促した当時の教育施策との関係や国語科教育観を緻密に分析し明らかにした。言語関連教科と，他教科の地理科・歴史科・理科の教科書との題材について，網羅・摘録・付加という三つの範疇の観点から具体的にその類似点と異同を明確にし，国語科の成立過程を詳らかにした。学習状況や社会的状況だけからではなく，国語科教育の内容における形式と題材，古典主義と進歩主義，国文の模範と国語の模範の視点からその歴史的変化及び内実を，教科書の具体的な内容の分析と考察から明らかにしたことは優れた研究として高く評価できる。「沖縄県用尋常小学読本」及び「台湾教科用書国民読本」も口語文体の比率の増加を実証する研究史料として分析対象とし，この分析と考察は本研究の高い価値の一つとして位置づけることができる。沖縄及び台湾の教科書に見られる口語文体の比率の増加とその内地への影響関係についてはさらに緻密な論証が必要であるが，これは今後の課題である。

よって，著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。